

# ふるさと御所 歴史探訪

## 江戸時代の 貨幣制度〈2〉

先月号では、江戸時代の貨幣制度の基本的なことを説明し、金・銀・銭の3つの貨幣があったことを述べました。ここでは、これらの交換率について説明し、江戸時代の物価と今の物価を比較することになります。

元禄期（1700前後）の公定の交換率は、金1両⇔銀60匁⇔銭4千文でした。時代が下がって文化・文政期（1804～1830）には、銭の価値が下がり、1両が6千文ぐらいになっていました。これらの交換率は、時代や地方で違いがありました。

江戸時代の1両が、今のお金でどれくらいになるかということが、よく話題になります。結論からいいますと、

物や時代によって大きく違うということです。文化・文政期の代表的なものの値段と今の価格を**表1**に示します。これらは、参考的なものです。

この表の一番右の列は、それぞれの品物の値段で換算すると、1両が何万円になるかということです。例えば、米の値段で換算すると、1両は、約5万円ということになります。また、大工の手間で換算すると、約28万円ということ、現在では、江戸時代に比べて人件費が高いということです。

2番目の列は、それぞれで1文が何円になるかということです。表に銀はありませんが、銀1匁が銭100文です。これらを100倍すれば、銀1匁が何円かがわかります。先月号で、テレビドラマの「銀2貫」について触れました。銀2貫目は、白米で換算すると約200万円、大工の手間では、約1千100万円ということになります。

現在と比べて、江戸時代に非常に高かったものとして、卵と砂糖があります。砂糖は、1800年前後から国内で生産されましたが、表の値段は国産のもの、斤で取り引きされていましたが、1斤は600gです。

菜種油は、主に「行灯」を用いての照明に使われました。10時間で約1合の油が必要でしたが、大工の手間で計算すると、1時間に約220円かかっています（米では40円）。今の照明の

電気代とは大きな違いで、太陽の動きとともに生活したことがよく分ります。

食事付きの旅館のことを「旅籠屋」といいました。表の値段は、都市部の安い宿のものです。旅館には、自炊して、大勢の人たちが相部屋で泊まる「木賃宿」というのがありました。木賃というのは、自炊のための燃料代という意味で、1泊燃料代込みで35文という記録があります。

《表1》江戸時代の物価（文化・文政期）

品物	単位	昔の価格		今の価格に換算	
		文	円	円/文	万円/両
豆腐	丁	15	150	10.0	5.0
卵	個	20	20	1.0	0.5
かけそば	杯	16	250	15.6	7.8
大根	本	13	200	16.0	8.0
酒	升	200	2,500	12.5	6.3
白米	升	60	600	10.0	5.0
砂糖	600g	400	130	0.3	0.2
菜種油	合	40	150	3.8	1.9
銭湯	回	8	350	43.8	21.9
飛脚（市内）	回	24	82	3.4	1.7
宿屋（2食付）	泊	200	8,000	40.0	20.0
大工手間	1日	400	22,000	55.0	27.5

文政10年（1827）以降の米価変化を**表2**に示します。麦飯の大麦の価格はわかりませんが、文政10年の小麦は、銀51匁で、米との差は少ないので

す。裏作で作るのは、米の混ぜ物の大麦は少なく、どうしても必要な菜種と小麦が中心で、庶民は麦飯を食べていたということには疑問があります。

《表2》米1石の値段の変化

年号	西暦	銀（匁）
文政10年	1827	58
天保8年	1837	166
弘化4年	1847	84
嘉永6年	1853	95
安政6年	1859	114
万延元年	1860	139
文久元年	1861	169
文久2年	1862	148
文久3年	1863	158
元治元年	1864	199
慶応元年	1865	352
慶応2年	1866	1,042
慶応3年	1867	945

天保7年（1836）は冷害によって大変な不作となり、翌天保8年には、「大塩平八郎の乱」が起っています。幕末に向かつて、米の値段が徐々に高くなり、慶応2年（1866）には、暴騰しています。値上がりは世情不安のためとされ、暴騰は、長州征伐の影響および買い占めによるものとされています。米の値上りに伴って、諸物価も上がり、明治維新につながったと考えられます。

今回は、ご指摘に基づいて、この稿を書きました。今後とも、よろしくお願いたします。

《参考文献》小野武雄編著『江戸物価事典』（展望社、1995）他

（文責 中井陽一）